

ベトナム、モン・クメール系諸民族の 起源説話の共通性

本 多 守

キーワード：洪水伝説、犬祖説話、兄妹婚、母子婚

はじめに

ベトナムには54もの公定された民族があり、支配民族のキン族と53民族 - その中にはマラヨ・ポリネシア語系、南アジア語系、シナ・チベット語系の人々 - がいる。わが国で紹介されているベトナムの民族起源説話は、支配民族キン族の、有名な「貉竜君（ラックロンクアン）とオウコー（嫗姫）」で、そのあらすじは、次の通りである [富田健次編訳 1991：9-23]。

キンズオン王が龍王の娘と結婚し、生まれた息子 貉竜君が海や平地、そして山の化け物を次々と退治をする。次に攻めてきた仙人の王の娘 嫗姫をさらって妻にして百人の子をもうける、その後、貉竜君は一人竜の国に帰ってしまう。妻がいったん呼び戻し、話し合いで貉竜君は50人の息子を連れて海に行き、嫗姫は50人の息子を連れて山に行くことになった。このうちの長男が文郎（バンラン）国の王《雄王》となった。

神性を持つ二人が結婚する話である。ベトナムと同じようにタイ族とモン・クメール系の居住する隣国のラオスの民族起源説話は、根岸範子・前田初江訳『ラオスの民話』（黒潮社）で紹介されている [根岸、前田1994：6-7]。

天地の交流している頃、天には一人の神の王がいて、地には3人の王がいた。天の王は獲物の分け前を人間に要求したが、拒否され、怒って大洪水を起こした。3人の王は浮き家を作り水かさが増して天に達した時に天にとどまり、水嵩が減る時に天の水牛を連れ帰る。その水牛で水稲耕作をしたが、3年後に死んでしまう。その水牛の鼻から瓢箪の蔓が出て、瓢箪の実が3つできる。瓢箪を鉄の棒で突いて出てきたのが山に住むカー族、そしてノミで開けた穴から出てきたのが平地に住むタイ族である。

両者を比較してみると、ラオスの建国神話には、ベトナムの建国・民族起源説話にはない洪水伝説が含まれている。洪水伝説は、ベトナムの近隣の国の民族に多く伝承されている。中国では支配民族 [大林1976：67-78] から雲南に居住するチベット系のイ族 [フレイザー（星野）1973：81-82（ロロ族）] [伊藤1985：61-62] [ヴィアル（鳥居）1966：175-181（ロロ族）]⁽¹⁾ や白族 [李（君島）1980：4-11] ミャオ、ヤオ族 [村松1973：206-238]、ナシ族、リス族 [君島1983：54-91] 等多くの民族が伝えている。ミャオ族は大洪水から生き残った兄と妹が結婚して、子孫を増やした、という [村松1973：206]。ナシ族は洪水後に生き残った男（神の子孫）が天女と結婚し3人の子を産む。その3人がチベット、ナシ、ミンチャ語をしゃべるよう

になった、という民族起源説話をもっている[君島1983：62-82]。

これらの洪水神話を研究した民族学者 大林太良は、東南アジアの洪水神話の特徴として、大洪水で人類が死に、生き残った兄妹が結婚して人類の祖先になるのが特徴であるとする[大林1976：67]

またヤオ族は洪水伝説に加え、犬祖説話を持つ民族としても知られており[村松1973：206, 232]、その祖先を槃瓠と呼ばれる犬とする。ミャオ、ヤオ族は地理的にはベトナム北部のタインホア省を南限として分布している⁽²⁾。

このように支配民族のキン族の起源説話にはない特徴が、近隣諸民族の説話にはある。

ベトナムでは各民族の昔話の収集が今まで活発に行われてきている。その収集者は各行政機関文化管理部門に勤務するキン族、あるいは少数民族の幹部たち、言語学者、民俗学研究者などさまざまで、殆どがベトナム語で出版されている。筆者はベトナム中南部で長期にわたりモン・クメール系民族の社会人類学的調査を行うかたわら、それらの資料を多数入手することができた。

そこで本稿では、キン族ではなく、隣接して居住するモン・クメール系民族、あるいは近隣民族の口頭伝承中の民族起源説話を提示し、上掲諸話の特徴である洪水伝説、犬祖説話などのモチーフに留意し、共通性を分析していきたい。本稿では使用する資料を筆者がベトナム語から翻訳し、本稿末に〔資料〕として掲載し使用する。

I 洪水伝説 - ヴァルクの型

洪水のモチーフについては、ベトナムの昔話の書籍、あるいは地方の民族紹介などで「タイグエンの少数民族は普遍的に洪水伝説をもっている[UBND Tỉnh Lâm Đồng 2001：439-441]とよく記される。今回の対象外の民族では、支配民族のキン族の『山王と水王』⁽³⁾[グエン他1980：23-24]の他、少数民族では北部トンキ

ン高地のトー族や黒タイ⁽⁴⁾[綾部1971：47-53][樫永2003：167-168]、ムオン族[チャンヴェトキーン(本多)2000：32-33]、マラヨ・ポリネシア系のラグライ族の昔話の中に2話『各民族はみな兄弟』『カイ・モシリー、モーベラ』洪水伝説がある[グエン・テー・サン他編(本多守訳)：2005]。

洪水伝説は、オーストリアの神話学者のヴァルク(Leopold Walk)により1.原初洪水型、2.宇宙闘争洪水型、3.宇宙洪水型、4.神罰洪水型に分類されている[大林1976：67-69]。1.原初洪水型は、最初に万物を覆う洪水の中から岩がそびえだし、そこに兄妹が降りて、子供が生まれて人類になる。インドネシアに多い。2.宇宙闘争洪水型は上界と下界をつかさどる神が争い、大洪水が起き、瓢箪に乗って生きながらえた二人が結婚する。但し近親婚を正当化するモチーフが物語の中に存在する。また近親婚の結果、瓢箪が生まれたり、形のない血だらけの塊が生まれ、そこから人類の祖先が生まれる。中国南部からインドシナ半島に多い。3.宇宙洪水型は東西二つのグループに分かれ、西はセレベス、ボルネオ、アッサム、インド東北に分布。罰されて起きたのではなく、理由不明で洪水が起きる。地面から突然水がわいたり、水をせき止めて洪水になる。男女の双子が生まれ、それが先祖になる。東は台湾の高砂族とフィリピンのルソン島北部の諸民族に分布。地面の中の水が突然湧き出したり、海があふれて洪水が起きる。男女の双子が生まれ人間の先祖となる。4.神罰洪水型はインドシナ北部のタイ系民族からロロ族、インドネシアのフローレス島などに散在。洪水以前に人類が存在していたが非常に行いが悪かったので、それを罰するために神が洪水を起こす。概略だが以上のように説明されている。

既述したイ族、白族、ミャオ、ヤオ族、ナシ族、リス族、トー族[綾部1971：47]、そしてラオスのものについては4.神罰洪水型である。わが国で紹介されているモン・クメール系の洪水神話は、カトゥ族の犬祖説話[宮本2001：2

ー7], バナ族の洪水伝説 [フレイザー (星野) 1973:80] があり, 前者は理由づけのない洪水発生を特徴とする3宇宙洪水型である。フレイザーのバナ族の説話は鳶と蟹のけんかによる洪水の発生という2宇宙闘争洪水型になる。

この章では, モン・クメール系の民族起源説話中洪水伝説のある説話が, ヴァルクのどの型に該当するのか, 本稿末 [資料] を用いて検討していく。

I-1 洪水の原因

1 原初洪水型

要件の「最初に万物を覆う洪水」に合致する話は存在しない。

2 宇宙闘争洪水型

要件「神性の対立による洪水」は2-1『各民族の起源』が該当する。この中ではオウチュウとのけんかに負けたカラスが水をコントロールして洪水を引き起こす。既述したフレイザーのバナ族の話は鳶と蟹が喧嘩して, 鳶に甲羅を傷つけられた蟹が怒って海や川を氾濫させ洪水を起こすというモチーフである。また既述したキン族の『山王と水王』とラグライ族の『カイ・モシリー, モーベラ』については生き物の戦いであるセダン族やバナ族と異なり, 明らかに天と地の神性を持つ者同士の戦いのモチーフがあり, 「洪水を起こす人格的な起因者, 人格神」が[大林1976:68]が登場する。『カイ・モシリー, モーベラ』では, 神性を持つ夫婦が強権を振りかざし, 洪水を起こす天と何度も戦い, その合間に人間を練って作る。そして天は講和を結ぼうと夫婦を天に呼ぶという展開になる。

3 宇宙洪水型

要件が「理由不明で洪水」だが, この型は多い。12話の中で, 5話。1『バップアチョ』, 2-2『セダン人の起源』, 4『タオイ族の起源』, 5『人間の起源』, 9『ダーリーン ドン』である。

4 神罰洪水型

この話は4話ある⁽⁵⁾。3『人間の起源』, 6-1『ボック コイ ドイ』, 『各民族の起源』, 9-1『万類と宇宙の起源』である。3『人間の起源』では人間の理由なきガマガエルの殺害を神に罰せられ洪水が起きる。6-1『ボック コイ ドイ』では, 太陽神の弟妹が人間を作ったがその素行に天の男神ボック コイ ドイが怒って洪水をおこした。[資料]には枚数の都合上掲載していないが, 同じバナ族の『各民族の起源』は火による天災のあと, 大きな家を建てようとした人間が天の怒りにふれ, 風雨のよる天災がおき, 人間の中で言葉が通じなくなったという話である。8-1『万類と宇宙の起源』では, 天が多くを罪を犯した人間に対し最初に大火を起こし, 次にそれを消すために洪水を起こしたのだった。

ラグライ族の『各民族はみな兄弟』では, 人間が一つの言葉で意思疎通できるのに怒った天が洪水を起こす。『カイ・モシリー, モーベラ』では上述した宇宙闘争洪水型の後に, さらに神罰洪水型が起きる。ここでは神の瓢箪を盗んだために, 神の怒りで大洪水が起きる。

洪水の発生の仕方だけをとらえれば, モン・クメール系では3宇宙洪水型が最も多い。次にもう一つの要件である洪水からの生存者に焦点を当てていく。

I-2 洪水からの避難方法と生存者

上記の洪水の発生原因によって分けられた型ごとに分析をしていく。

2. 宇宙闘争洪水型

2-1『各民族の起源』では, ゴックリン山に登った姉と弟のみが生き残った。

3. 宇宙洪水型

該当する7話のうち以下の話の詳細が明らかで検討可能であった。1『バップアチョ』, 2-2『セダン人の起源』, では, 避難方法として高い山に登り, 生き残ったのが犬と娘である。4『タ

オイ族の起源』では、避難方法としては、地底人の3人(兄、姉、弟)が舟に乗って洪水を逃れ、兄は天に行き太陽神に、そして地上に戻ったのは姉と弟であった。5『人間の起源』では山に登った娘だけが助かった。また[宮本2001:2-7]では避難方法は不明だが生き残ったのは犬と娘である。9『ダーリーン ドン』でも避難方法は不明だが生き残ったのは男女二人である。

4. 神罰洪水型

3『人間の起源』で助かったのは筏に乗った3人の兄弟で娘はいない。しかも長男は洪水から免れる過程で太陽神になる。6-1『ボック コイ ドイ』は太鼓に乗って避難した弟妹である。このようにしてみると、2. 宇宙闘争洪水型と3. 宇宙洪水型では、4『タオイ族の起源』を除き、高い山に登って逃げるのが共通している。生存者は血を分けたキョウダイか、娘と犬、あるいは娘だけと分かれる。4. 神罰洪水型はいずれも避難具を使用しての避難が特徴的である。

生存者に女性がない話は[資料]中にもこの中の1話だけである。

I - 3 近親婚の存在と正当化

次に、生存者がどのように民族の祖になるのかを検討していく。

2. 宇宙闘争洪水型

2-1『各民族の起源』では、洪水で生き残った姉弟が、結婚する。いくら結婚相手を探しに行っても互いにしか会わないので神の思し召しだと思い結婚するという近親婚の正当化が描写される。

3. 宇宙洪水型

2-1『バップアアチョ』では、近親婚のモチーフはあるが、それは生存者の娘の小便を犬が嗅いだ結果生まれた男女の結婚である。長期にわたり別々に結婚相手を探して、二人が再会した

時には相手が自分のキョウダイとは気づかなかったという正当化の描写がある。

2-2『セタン人の起源』でも生存者の娘の小便に犬が小便をすることによって娘が妊娠し男女を産む。この二人が結婚する近親婚のモチーフがある。この近親婚の正当化も互いに相手が自分のキョウダイとは気づかなかったという理由による。

4『タオイ族の起源』は上記の2話と異なり、生存者が姉弟であるがこの二人は結婚しない。姉の寝床に犬が小便をすることによって瓢箪を産み、瓢箪から出てきた男女と互いに結婚する。この話では生存者同士の結婚 - 近親婚 - を認めていない。そして上記のような犬の小便と関係した異常誕生で生まれるものは瓢箪である。従って、この話では近親婚は存在しないとみならず。この瓢箪から生まれた男女と生存者の姉弟は結婚することになる。瓢箪を介することによって近親婚 - 母子婚 - を正当化しているのかもしれない。

5『人間の起源』では、生き残った娘が水たまりの水を飲んで妊娠し羽根のある男女を出産する。この二人が結婚するのだが、相手がないので仕方なく結婚したという描写で近親婚が正当化されている。

4. 神罰洪水型

3『人間の起源』で洪水後残されたうちの次兄は月になり、末弟はヤーンの法術を学ぶ。末弟は結婚相手の女性を連れ帰るが血縁者ではなく、近親婚は存在しない。

6-1『ボック コイ ドイ』は兄妹が結婚したという描写はあるが、正当化の描写はない。

以上、近親婚の存在と正当化について分析すると、どちらもあるのが3話であり、近親婚のみに焦点を当てれば4『タオイ族の起源』を含めれば6話になる。

I-4 ヴァルクの型との一致検討

I-1で洪水の発生原因で分けた結果は、1型

(洪水の型の名称は以降数字のみで表す) はなく、2型も、1話。しかもこの1話の特徴である闘争は、要件の神聖なもの同士の対立の描写が弱い。数量的にみれば、圧倒的に3型が多い。次に4型である。

1-2で検討したのは、2型の要件の避難具の存在である。しかし、2型では避難する道具はなく山に登り避難して姉弟が生き残る。洪水の型を超えて検討すると、避難具がある説話は3つあり、3型に1話、4型に2話と散在する。

1-3で検討したのは、2型と3型に共通する近親婚のモチーフ、そして2型の正当化のモチーフである。検討結果は2型ではどちらの要件も充足する。

3型で分析した結果は6話だが、洪水発生要

因の型分けを考慮しなければ、13話中7話が兄妹婚になる。

2型では近親婚の結果、異常出産したモノから人類が誕生するというモチーフが要件になっているが、そのようなモチーフは検討の結果存在せず、他の洪水型をチェックしてもそのモチーフはない。

以上の結果を、今までの分析結果を洪水の発生要因から型を分けて作表した《表1》。

結果として、どうもヴァルクのタイプ分析では合致しないところが多い。今まで検討して判明したのは、兄妹婚について、近親婚の結果に異常出産による民族誕生があるというモチーフではなく、異常出産の後に近親婚があり民族が誕生するというモチーフが多い点である。3型

表1 洪水型別モチーフの要件検討表

資料	タイトル	洪水の型	避難具	犬祖	兄妹婚◎ 母子婚	正当化
1	バップアチョ	3	山	◎	◎	◎
4	タオイ族の起源		舟	◎	妹の産んだ瓢箪からの男女と兄妹が結婚=母子	△
2-2	セダン人の起源		山	◎	◎	◎
2-1 註	註5		?	◎	母子	?
*	[宮本 2001 : 2-7]		?	◎	母子	?
5	人間の起源		山	×	水を飲んで妊娠、出産した羽根のある◎	◎
9	ダーリーン ドン		?	×	男女	—
2-1	各民族の起源	2	山	×	◎	◎
3	人間の起源	4	筏	×	×	—
6-1	ボック コイ ドイ		太鼓	×	◎	×
8	ントウップ・トゥール		×	×	練った人間から生まれた◎	×
9-1	万類と宇宙の起源	1	×	×	天による◎	×
**	各民族はみな兄弟	4	太鼓	×	男女	—
** *	カイ・モシリーとモ ーベラ	2 4	太鼓	×	(神性夫婦による創造) 男女	—

の7話のうち、5話が洪水の後の出産が犬の関与による出産、1話が水を飲んだことによる出産という圧倒的比率となる。モン・クメール系の洪水伝説のある民族起源説話のうち、他の洪水型で異常出産の後に近親婚があるケースはない。つまり、モン・クメール系では、「原因不明の洪水」という3型の一部要件に加え、「異常出産の後に近親婚がある」が一つの特徴といえる。

II 犬祖説話

今までの検討の結果、多くの犬祖説話が存在することが明らかになった。犬祖説話(犬舐入)については、福田晃がA,B,Cの三つの型に分けた[福田1976:10-85]が、大林はこれを含めて8つの型⁶⁾に組みなおしている。そのうち、東南アジアの型として大林は3つの型をあげた。あげたのはここでは洪水と関連した犬祖説話なので、洪水型の検討から入る。洪水型の要件は、1)大洪水があり、人類は死滅した。2)生き残ったのは一人の人間と犬、3)この人間と犬が結婚して人類、あるいは特定民族の祖になる[大林1993:125-134]。

これに留意して前章での検討を用いて《表2》を作成した。表のとおり、5話が大林の洪水型にほぼ合致し、さらに大林が分けた他の型であ

るカラング型と癡病型の共通の一つの要件である、息子は父の犬を殺し母と結婚する、というモチーフを持つことが分かった。もう一つの母子結婚 - 犬と結婚後、男一人しか生まれなければ母子婚 - の要件は、ここでは兄妹婚と二分している事例なのでそうとはいえない。また、母子婚のモチーフはアメリカ人類学者サリー＝ムーアの統計的研究によると、選系出自、父系出自の社会に多いといわれている[大林1994:45]が、その説を裏付けるように上記のセダン、タオイ、カトゥ、ヴァンキェウの各民族も父系社会を形成している。

結

紹介した説話を以下の特徴 - A 民族起源説話 B 洪水伝説 C 犬祖説話 D 兄妹、姉弟婚 E 異常誕生 - の有無で《表3》を作表した。

結論として《表3》を見れば、モン・クメール系民族の民族起源説話では、北部のモン・クメール系民族に限れば、「原因不明の洪水」説話が半数を占め、そのうちの大多数に「犬祖説話」「異常出産の後に近親婚」が加わり、それが特徴となる。しかし南の民族に行くにしたがって、その特徴は消えてしまうのである。大林は犬祖説話を東南アジアないし華北で発達

し、兄妹始祖型の洪水神話と結びつけたとする。さらに兄妹始祖型洪水神話よりも犬祖型洪水神話が新しい可能性を指摘している[大林1993:129-130]。犬祖説話は最初に述べたようにヤオ族が持ち、ヤオ族はベトナム北部に住む。筆者の検討した犬祖説話を持つ洪水神話を保持していたのはジェチェン族、タオイ族、セダン族、カトゥ族、ヴァンキェウ族であり、彼らは北部タイグエンに居住し、比較的ヤオ族と近い距離にある。16世紀になるとタオイ、カトゥ、セダ

表2 犬祖説話の洪水型の検討

資料	タイトル	大林による洪水型の要件			犬殺しと結婚
		洪水による死滅	生き残りが犬と娘	人間が犬と結婚	
1	パップアチョ	◎	◎	◎ 小水を嗅ぐ	◎ 兄妹
2-2	セダン人の起源	◎	◎	◎小水に小便をかける	◎ 兄妹
2-1 註	註5	◎	◎	◎	◎ 母子
*	[宮本2001:2-7]	◎	◎	◎	◎ 母子
4	タオイ族の起源	◎	3人と1匹	△寝床で小便	× 母子

表3 モン・クメール説話分析表

資料	タイトル	民族名	A	B	C	D	E
1	バップアチョ	ジェチエン	◎	◎	◎	◎	×
2-1	各民族の起源	セダン	◎	◎	×	◎	×
2-1 註	註5	セダン	◎	◎	◎	母子	×
2-2	セダン人の起源	セダン	◎	◎	◎	◎	×
3	人間の起源	ヴァンキェウ	◎	◎	◎	母子	◎
4	タオイ族の起源	タオイ	◎	◎	◎	×	◎
5	人間の起源	カトゥ	◎	◎	◎	◎	◎
	[宮本]	カトゥ	◎	◎	◎	母子	×
6-1	ボック コイ ドイ	バナ	◎	◎	×	◎	×
7	ントウップ・トゥール	チル ムノン	◎	?	×	×	×
8-1	万類と宇宙の起源	ステイエ	◎	?	×	×	×
8-2	ステイエの起源	ステイエ	◎	×	×	×	×
8-3	ステイエの祖先	ステイエ	◎	×	×	×	◎
8-4	ステイエ族の起源	ステイエ	◎	×	×	×	×
9	ダーリーン ドン	マー	◎	◎	×	×	?
10	ムノン族の伝説	ムノン	◎	×	×	×	?

ン、ジェットリエン、ヴァンキェウ族は侵略してきたラオと、19世紀後半には侵略してきたシャムの影響を受けながら移動してきたといわれている [Đặng Nghiêm Vạn (biên) 1984 : 95-107] [Trần Mạnh Cát 1984 : 199-204]。この民族移動でのタイ系民族との接触の過程で犬祖タイプの説話が伝播してきたと考えられる。それ以外のモン・クメール系民族が犬祖説話を持たず、かつ兄妹婚姻のモチーフがより広いことを考えると、大林の言う「新しい」の傍証になるだろう。

また、犬祖説話のカラング型のモチーフの一つである⁽⁷⁾異常妊娠のモチーフ—小便を飲む、臭いをかぐ、かけられる等—は、マラヨ・ポリネシア系のジャライ族やチャム族でも見られるモチーフだが、犬祖説話からの影響なのだろう

か。

洪水からの避難具の使用のモチーフは、実はラグライ族の説話にある。ラグライ族の『各民族はみな兄弟』では、洪水を避けて神の眼に触れないように太鼓に隠れた、近親者ではない男女二人が山の神の助けで生き残る。『カイ・モシリー、モーベラ』では神性を持つ夫婦が男女二人を太鼓に入れて救うのである。このようにモン・クメール系でない民族であるラグライ族の話に登場する。もしかしたら、避難具の使用モチーフはマラヨ・ポリネシア系の説話からの影響なのかもしれない。

本稿ではタイトルを「民族起源説話」にし、モン・クメール系のみを対象としたが、その量はモン・クメール系20民族中、10民族でしかな

い。ただ検討した結果、マラヨ・ポリネシア系の説話とのモチーフの類似性など新たな課題に巡り合うことができた。中国神話ではすでに百田氏が162話もの洪水神話を分析し、細分化しているが、筆者の扱ひ量ではそれを適用するとまとまりを欠いてしまうため扱わなかった〔百田 2004〕。今後、質、量ともに検討を重ね、その成果を次の機会に報告したい。

〔資料〕

資料を整理していくうえで、話のタイトルの後に含まれている特徴についての記号 - A 民族起源説話 B 洪水伝説 C 犬祖説話 D 兄妹、姉弟婚 E 異常誕生 - を併記する。また、すでに翻訳・紹介済みのものについては抄訳とする。

資料1：『パップ アチョ』〈抄訳〉ジェチェン族 ABCD

人間と動物が平和に暮らしていたとき、ある日突然滝のような大雨が降ってきた。本当に浴びるような雨が地面に降り注いだ。太陽の登る方向にぼんやりとみえる遠い山並みの下にあった水はどんどん嵩を増した。(水嵩が増す場面 省略)

山の頂には、ただ一人の娘だけと一匹の犬が生き残っていた。犬の周りにはその仲間たちがいた。

(水が引くまでの場面 省略)

娘は犬と一緒に生活した。ある日、娘が小便しに行った後、犬がやってきてその小便をした場所を嗅いだ。しばらくして、娘は受胎した。お産の日になり、その娘は男の子と女の子を産んだ。(以下、二人は元気に成長した。母に自分たちの父が誰か尋ねると答えは「犬が父だ」というまでの場面、省略)

ある日、二人は犬と一緒に森に入った。森深く入ると、兄は妹に犬を捕まえ殺すように言った。犬を殺し終えると、彼らは犬の死骸を石の洞穴に投げ捨て帰った。母は二人が戻ったにも

かかわらず犬が戻らないので、二人が犬を殺したと悟った。

(以下、子供たちが配偶者探しを母に求め、母の指示で探しに出る場面・・・省略)

最後に男の子は一人の見知らぬ女の子にあった。そして女の子も見知らぬ男の子に会った。実はそれは兄であり妹であったが、二人はもはやそれに気づかなかった。そして二人は結婚し一緒に生活した。

二人は家を建て、焼畑を開き、畑を作り、米をまき、玉蜀黍をまき、子を産み、孫を産み今日のように大勢になった。

今日、昔の話を思い出したとき、誰もが犬を思い出し、昔の遠い時代に母の言った言葉を思い出す。《パップ アチョ》⁽⁸⁾

[本多守訳2004b：155-157] 所収を部分修正

資料2-1：各民族の起源⁽⁹⁾ (セダン族) ABD

遠い遠い昔、人間は平和に楽しく暮らしていた。生活は安定していたが、クレンチウ(オウチュウ鳥⁽¹⁰⁾)とクタムホーイン(黒カラス)が口論を引き起こした。彼らはやたら殴りあい、最後にカラスが負けた。カラスは非常に怒り、そこいら中の川に行き、水がオウチュウを殺そうと水をせきとめた。水はあらゆるところから流れ出た。水は溢れ、全てを飲み込んだ。木の梢、山の頂は皆水に覆われた。生き物は皆死に絶えた。地面は海と化した。ゴックリン山の頂だけが水没をまぬがれ、そこに血のつながった姉と弟だけが生き残った。(水が引いた後他に人がいないか探し回る場面まで省略)二人はさらに遠くへ、より遠くへと進み、懸命に全く違う方向へ行く道を探した。しかし夕方になるとまた再会してしまうのだった。ヤーンの思し召しと考えた二人はそれで結婚し、生計を立て、大勢の子を産んだ。二人はわが人類の祖先となった。セダン族は彼らのことをジャとボック(祖母と祖父)と呼ぶ。二人の祖先は子供たちに焼畑を開くことを教え、畑作りを教え、カニを採ること、貝を採ること、野菜を探し、芋を

探し食を満たす方法を教えた。

ある日、二人は子供たちにヤーンにお供えをするためにおいしくて珍しいものを探してくるよう命じた。子供たちは朝早くから出発し、各々異なる道を進んだ。末っ子は遠い平野部に行き、魚、米、塩を見つけ、月日とともに山へ帰る道を忘れそこにとどまった。彼らは妻を娶り、子を産み、土間形式の家を建て、水田を犁で耕し、魚を捕まえ、塩を作り、今日のユワン（キン族）になった。数人の兄たちは美しい牙をもつ象の群れを追いつけるのにふけり、蜂蜜を探すのに、鹿を獲るのに熱中したので、高い石の山、密林深く入り込んだ。南にいった者が今のエデ、ジャライ族の祖先である。北に行った者がコトゥ、コール、ジェ族の祖先である。東にいった者は後に繁殖しフレになった。長男は年老いた父を母を愛していた為あえて遠くには行かず、その子孫は今日のセダンになった。

各民族全ては異なる地域に居住しているが、彼らは皆兄弟であり、ジャとボックの子孫である。

[本多守訳2004b：155-157] 所収を部分修正

資料2-2：セダン人の起源<抄訳> ABCD

かつて、各集落が一緒に平穏に暮らしていた頃、太陽は囲炉裏の火のように焼畑、稲、玉蜀黍に照りつけていた。銀のように穏やかな月は、夜な夜な人々が遊び、酒を飲めるように光を灯した。

しかし突然、黒い雲がやってきて太陽と月を隠してしまった。そして雷鳴と強風が沸き起こった。地上はぼんやりとして、人の顔や森は見えず、鳥のさえずりも聞こえず、昼も夜もなくなってしまう。雨が空からまるでたくさんの小川のように山や森にどっと降ってきた。(水嵩が増す場面省略) 一人と一匹はチャカン地区で一番高いゴック・ローン・ボワン山の頂に登った。さすがに水はそこまで来ることはなかった。その女性の名はサ・ガイといい、犬の名はボ・チュアといった。(水が引く場面省略) ある日、

犬は突然サ・ガイが小便をした場所に小便をした。その後、サ・ガイの乳房は黒く、食は進まなくなり、腹は次第に大きくなり、そして一人の男の子と女の子を産んだ。男の子はポーリン、女の子はポーロアンと名づけた。

(2人が犬である父を殺す場面省略)

二人は日に日に大きくなった。サ・ガイは娘を遠い水辺に連れて行き、一人暮らしさせ、息子は山の頂で自分と一緒に住ませた。

(母が妹を連れてくるまでの場面 省略)

母がポーロアンを連れ帰ったとき、兄妹は二人ともすでに相手の顔を忘れており、それで夫婦になったのである。(母に妹のことを尋ねても答えない場面省略) 夫婦は4人の子を得た。それは3人の娘と一人の息子だった。三人の娘はビア、ムイ、スイといい、息子の名はドアンといった。

両親は美しいビアとムイを一人で暮らさせるために平野に連れてった。この後、二人の娘はそこで夫を娶った。ドアンとスイは山にとどまった。そして二人の両親は歳をとり焼畑に出られなくなり、そして死んでしまった。兄妹は一緒に生活し、兄は妻を見つけることができずに独身を通し、テナガザルになって森を放浪した。妹スイはラオ側の若者ホマーイに会い、鉦や編み紐と交換に、夫にした。

二人はたくさんの子を産み、囲炉裏は日増しに増え、家も日増しに増え、セダン人になった。

遠いこのことを思い出し、セダンの人、特に婦女は犬の肉を食べてはならず、決して犬を叩いてはならず、犬が死ねば人間と同様に悲しむのである。

[本多(訳) 2005：140-142]

資料3：人間の起源<抄訳> (ヴァンキェウ)

ABE

焼畑の季節を森の葉を取り数えても十分でないほどの遠い昔、人々がまだ雨蛙としゃべることができ、天の娘と話すことができ、天の家に行つて囲炉裏の火をもらっていた頃の話である。

その頃、高くそびえる山に三人の兄弟が一緒に住んでいた。

(人間の罪を訴える日、獣たちの訴えが却下されていく、そんな中ガマガエルが人間の罪を説く。人間を罰する洪水から逃れる方法を長兄は蛙に教えてもらう場面を省略)

「帰って巨大なバナナの筏を作って、家や山が浸水したときに御飯と囲炉裏の火を入れ、それに乗りなさい。水が増えれば筏も一緒に持ち上げられるし、水が減れば筏も下がるよ。死にゃあしないさ」

長兄は蛙の一言一句を記憶にとどめると、すぐに蛙を放して一目散に自分の家に帰ると、二人の弟に洪水から逃げるため準備をするように告げた。

果たして十日後、風の神は嵐を引き起こした。それはそうぞうしく怒り叫んでいるようだった。続いて雨が降ってきた。

(増水から3人は筏に乗って逃げ、長兄が天に残る。二人は地に着き、天の長兄は太陽神になった。ある日、弟が出かけて妻を連れ帰る、そして妻を置いて再び出かけている間に兄は妻を奪ってしまう。二人は弟に気づかれないように馬に乗って月に逃げる。以上の場面省略)

弟は失望のあまり泣きすぎて涙は枯れはてた。自分の妻、兄はどこに行ってしまったのだろう。ひづめの跡の火はまだめらめらと燃え続けていた。彼は突然自分がまだ神の水筒を持っていることを思い出し、すぐに火に注いだ。火は消えた。象の皮膚のように黒く焼かれた地域で、息がつまるほど焦げ臭いにおいが立ち上り、突然奇妙な瓢箪が生えてきた。

(瓢箪の成長などについて、省略) 瓢箪の中から兄弟⁽¹¹⁾が出てきた。

最初に出てきた長男はタオイ族である。彼は瓢箪の皮の炭になった窮屈な所をよじ登ったために、灰と炭で皮膚は汚くなった。

次に出てきた次男はヴァンキェウ族である。このとき出口はもっと広がっていたがまだ狭く熱かったため、彼の髪は燃えてちぢれ、やっば

り炭と灰だらけになった。それで彼の肌も灰黒色になった。

三番目は三人の集団だった。先頭もまた炭の中をくぐりぬけた。二人目は先頭と三番目の間に隠れていたもので、炭がつかなかった。三番目は炭にまみれ、先頭のように黒くなった。彼ら三人の頭は暑い日の中を通らなければならなかったので皆髪がちりぢりになった。先頭はエデ族、二人目はセダン族、三人目はバナ族である。第四の集団は他のたくましい者が出てきた。彼らは押し合いへしあいして出てきたので、炭だらけになった者もいた。あいだに隠れた者は白くて美しく、ほとんど汚れなかった。しかし大勢で出たために他の者のわきに頭をつっこむ者もあり、そのため髪が燃えないものもいた。この集団がクア、サック、メオ、ヤオ、タイなどである。

第五集団は、最初がクメール族、次にラオ族、ターイ族だった。このときにはすでに出口は広くなっており、灰はひらひら飛ぶだけだったので、ある者にはくつついたが、つかない者もいた。このためこの中に、黒ターイ、白ターイ、高地ラオ人、低地ラオ人⁽¹²⁾がいた。

最後に出てきたのがキン族である。彼は瓢箪の中に長い間いたので体がちょっと黄色い。この末子はきゃしゃで敏捷だったので全く灰がつかなかった。

各々瓢箪の実から出てきた人たちの両手には一握りの五穀、農産物があった。何人かはキャッサバの束を担ぎ、何人かは芋の芽を持っていた。集団の者たちは玉蜀黍や落花生、さまざまな種、ザボンやオレンジのような種を持っていた。

全員が末っ子の周囲に集まった。末っ子はこのときすでに土の神だった。

土の神は告げた。

「汝たちは一つの瓢箪から出てきた血を分けた兄弟である。私は汝らを大きくする。汝たちに子孫が焼畑をし生活できるようにこの大地を与える。広い土地を分け、各々に異なる土地を与えよう。タオイとヴァンキェウの最初に出て

きた二人は祖先の地にとどまるのだ。この地は山頂にある。儀礼に気を配り、尾根を焼き、畑を作り、またそこで狩りをして食料になる鹿や猿を得よ。

三番目の集団、すなわちエデ、バナ、セダンはより足がたくましい。汝らは太陽の左手の山の方へ行くのだ。そこにはたくさんの森、たくさんの山、深い川がある。そこで焼畑をし南の大地を守りなさい。

四番目に出てきた者たちは太陽の右手の山の方に行きなさい。そこにはたくさんの森があり、たくさんの山があり、高原があり、低い丘がある。きれいなところに住みたい者は山の頂に住みなさい。米を食べたい者は平地に、狩をした者は密林に住みなさい。汝らは北方の台地を守りなさい。

クメール、ラオ、ターイは夕方に太陽の昇る尾根の方に行きなさい。クメールは一番南の岸のない、川の近くで水のあるところに行き、魚と米で生計を立てなさい。ラオは真ん中、ターイはその上に。足のたくましい者がコン河を渡り生活しなさい。わが大地はあちら側にもある。

末っ子であるキン族は病弱だが賢い。

汝たちは自分の末弟をもう一度見なさい。この子は小さいがお前たちのように背負い籠を担がないで、一本の長い木を取って五穀や農産物の種が入った二つの大籠を持っている」

兄たちは囁いた。末っ子は頭がよく欲張りだ。神は続けて言った。

「私は末っ子がとてもかわいい。末っ子は私と一緒にいるのにふさわしいが、私はもうすぐ天に帰らなければならない。私は末っ子にあそこの肥沃な平地を与えよう。そこには岸のない大きな川がある。お前はそこで魚を取りなさい。そこには高地も低地も、湿地も乾燥した土地もあるからそこにあのたくさんの種をまきなさい」

土の神はそう言い終えると、雷鳴と閃光の中心に姿を消した。兄弟たちは廟でヤーンに儀礼をし、別れを告げて各自の土地に行った。

今日、太陽の赤い色があせた時、我々は兄の影を見る。長男は太陽に住み、手にはまだ黒く燃えたエビをつかんでいる。月明かりの夜、満月の中に馬と二人の人間が座っているのが見える。馬と人間はどちらも振り返って地球を見ている。(次男は月の神になったのである。) 月が山の頂に近づいたとき、長い馬の面は地上の草木をむさぼっている。

土の神は天に昇った。兄弟とヤーンは子供を生み続け、その子孫たちはわが国土の兄弟民族になったのである。

[本多2005:146-154]を部分修正

資料4：タオイ族の起源<抄訳> ABCE

(天地開闢の様子、省略) そのとき地上には三人しかいなかった。彼らは兄弟で地中から這い上がってきたのだ。最年長が男、二番目が女で、三番目の末っ子は男の子だった。

ある日、一番大きな黒雲が翼を得て飛んできて三人の生活している場所を覆った。天地は突然そこかしこで燃え、化け物が暗い影とともにやってきてわめきかく乱破壊した。三人は慌てて森に入り小川を渡った。そして舟を作り、生きていくため日が当たり、稲のある場所を探した。彼らはたくさんの滝壺、たくさんの森、たくさんの谷を通り過ぎた。しかし暗闇はいたるところに溢れていた。舟はどんどん進んだが、化け物はわめきながら追いかけてきた。水が彼らの舟を森の葉のようにぼろぼろにしたころになってやっと日光をみつけることができた。三人はとても喜んだ。そこには青々とした緑があり、動物たちの話し声が聞こえた。しかしその会話は彼らを驚かせた。『まもなく地面が割れ、水がすべてを飲み込み、泳ぐヒレのないどんなものも、翼のないどんなものもみな死んでしまうだろう』と。

三人は自分たちが魚のようなヒレも、鳥のような翼もないのでとても不安になった。長い間話し合って結局万物を助けるためヤーン アロバン⁽¹³⁾を呼ぼうと巨大な太鼓を作ることにし

た。

太鼓を作り終えるや地面から水が溢れ森や山を覆いつくした。三人の舟は広大な水の上をゆらゆらと漂った。食べ物はどこにもなかった。腹を減らした三人は不安になったが、交代で太鼓を叩き、その音は天に響き、水を震わせた。

(天の村に太鼓が届き、弟が天の村の娘と結婚した。天に兄が残り、水が引いて二人は地上に着いた。残った兄は地の二人に対し食糧の種類を与え、土を柔らかくした。以上の場面を省略)

二人は一緒に暮らしたが結婚するわけにはいかなかった。ある日、犬が突然姉の寝床に立って小便をした。一晩の後、姉は突然疲れを覚え、乳首が黒くなり、おなかの日増しに膨れ上がった。一年後、彼女は瓢箪の実を生んだ。瓢箪の中からささやきが聞こえた。そこで兄は火のついた小枝を取り瓢箪に穴を開けた。するとそこから男女二人が走り出てきた。兄はそのうちの女の子と結婚し、姉は男を夫とした。

二組の夫婦は生活地を求めて別れを告げた。姉夫婦はとどまって山と森とともに生活した。兄の家族は子供を連れ、キジバトの砂袋をもって太陽の方向へ向かった。

兄夫婦は進み続け、最後に広大な平野を見つけ出した。彼らは水稻を作り、瞬く間に裕福になり、その一族は日に日に増えて現在のキン族になった。

姉夫婦はとどまって陸稲をつくった。そのため収穫はさほど多くなく、苦勞して働き続けたが、十分食べられるまでには至らず、その一族は時を経て増えたのである。彼らはあちこちへと移動して大きな一族の子は仕事を始め、多くの新しいヴェール(集落)を建設し、現在のタオイの祖先となった。

(タオイの犬殺しの禁忌の由來說明省略)

[本多2004b: 227-230]を参照。

資料5：人間の起源(カトウ族) ABDE

(ムルンギの前の様子 省略)

突然、ある日西の山の頂から炎が空へ噴出し

た。炎の先はあつという間にどす黒い赤い水になり、滝が落ちるようにわめきたてた。ほとんどの家、白は焼失し、生き物は死んで固くなり、一方人間は、ある者は火に焼かれ、ある者は流れに入って茹でられたり、巻き込まれ沈んだ。これは最も恐れるムルンギ(洪水)である。(ムルンギの後の様子省略)

人類といえば、一人の娘がいるだけだった。その日、森に遊びに行つて山の頂の木によじ登つて難を逃れたのだった。

高い木の上から彼女はあらゆる集落、バーン、水田を見たが一つの人影も見えなかった。彼女は非常に怖くなった。彼女はこちらの森、あちらの丘とさ迷った。お腹がすけば新鮮な果物を探して食べ、のどが渴けば水溜りに行つて飲んだ。しばらくして、娘は突然妊娠し、二人の子を産んだ。一人は男の子で一人は女の子だった。二人は体中に羽根があった。

月日がたつとともに、二人は大きくなった。ある日、男の子は森に果物を拾いに行つた。不運にもリスの罠にかかってしまった。リスは獲物のいる罠を見て森じゅうに知らせた。

(動物たちは罠を解いた男の子が逃げた場合に備え、様々なものを用意した。そして羽根を抜いた。なんだかわからないので貝に聞くとマヌス(人間)だとわかる。以上の場面省略)

獣たちは以前からマヌスについて貝から聞いていた。彼らはあわてて四方に走つて逃げ、槍、鉞、大弓を残した。

若者は動物たちが走つて逃げたのを見て、家に帰つた。彼動物たちが置いていった罠や大弓やその他のものを持っていくのを忘れなかった。鉞のおかげで木を切り、罠と大弓で獣を狩つたので、彼らは住む家があり、畑があり、彼らの生活は日増しによくなった。母が死ぬとき、兄妹はすでに立派に成長していた。誰もいなかったの二人は結婚せねばならなかった。二人は子を産み、子は孫を産み、その子孫は日々増えていった。

森はとても狭かつたので、彼らは平地に下り

て住んだ。仕事が忙しかったり、遠く離れていたりで、彼らはほとんど互いに訪ねることはなかった。これより、しゃべり方の違う民族が生まれた。カトゥ族は山に住み、キン族は下流に住んだ。

[本多（訳）2005：144-145]

資料6-1：ボック コイ ドイ（バナ族）ABD

（男神ボック コイ ドイ、女神ラコネケが3人の子を産み、長男は「ラポン」で太陽神となり、弟と妹の「ラボック」は塵界に降り、人類の祖先となった。その子孫たちはのちに悪さをする様子まで省略）ボック コイ ドイは怒って何日も雨を降らせ、そのため大洪水となり、人類は死に絶えた。ただあの二人の弟妹だけが太鼓の中にあらゆる種類の動物の番を連れて逃げた。彼らは洪水の難を逃れ、ボックソゴ（太鼓神—太鼓の中で災難を逃れた祖先）と呼ばれた。水が引いたとき、彼らは抜け出て、動物たちを放した。地表はまた鳥や獣たちであふれた。ただ太鼓の中に隠れていたときに食べつくした糧食があった。一匹のアリが神の稲の種をくれた。蒔き終えると、よい収穫があった。一つの米粒で鍋一杯のご飯が炊けた。

弟妹ボックソゴは結婚し、18人の子を産んだ。7人は男で11人は女だった。しかしこの姉妹はみな、この兄弟と結婚したので、それで子供を産んでも誰が父かわからず、ただ母だけがわかった。家庭は密だったので、彼らは互いに分かれて森深く入り、家を作るために様々な方向に木を探しに行ったので、互いにはぐれた。長男は兄弟姉妹とその子が戻ってくるように鉦と太鼓を鳴らした。彼らは互いの近くに住むことにし、集会場を建設した。集会場が建設し終えそうなときになって、天は何日も暴風を引き起こした。樹木は混乱し、皆逃げ惑った。集会場に戻った時不思議にもあらゆる人が一つの言葉をしゃべった。もう互いに理解し合えることはなかった。

[Vũ Ngọc Khánh (biên) 1985：18-20]

資料7：ントウップ・トゥール（チルムノン）A

昔、まだ混とんとしてぼんやりとした時代、夫婦の神がいた。夫をントウップ・トゥール、妻はランズンといい、地球、太陽、月、星を作った。それから二人は土を取り、男と女の人間を練って作った。夫をハゲー、妻をクゲーと名付け、地上を統括させた。二人を結婚させると、ハド—という男の子とクドンという女の子が生まれた。この二人も夫婦となり、たくさんの子を産んだ。

この時、人類はまだ家を作ることもできず、食糧もなかった。彼らは石の洞穴に居住していた。ある日、一つの石の下から大きな音が聞こえた。彼らが石を転がすと一匹のカニが這い出てきた。カニの後には、たくさんのエビや魚、ウナギ、ドジョウでいっぱいの水が続いた。水は地表を流れ川の流れ、湖沼、平野、大海を作り出した。この不思議な水の流れのおかげで、人々は食糧を得、次第に植えることを知り、飼育することを知り、生計を立て、喜びで満ち足りた。

人々は次第に増え、その地区の食糧では生きるのに十分ではなくなった。人々は生計を得るためにより遠くに互いに別れて行こうと話し合った。遠くに行ったが生まれ育った故郷より慣れることはなかった。人々は考えた。人々がどこに行っても見えるとても高いところが必要だ。それを見れば自分たちの故郷の方向がわかるから。シロアリが土を啜えて土を積み上げるのを真似て、人々は一緒になって土塊を担いで運び積み上げた。その土が雨風に侵食されることがないように、人々はある方法をひらめいた。年頃の娘を持つどの家も鉦を一つ持ってきてその盛土が壊れないようにかぶせることにした。だんだん盛土は山になった。彼らはその山をランビアンと名付けた。その山は今でも存在している。

山を覆い終えると、各家族は各地に散らばった。皆兄弟姉妹だった。人々はまだ、6人の娘

を覚えている。

各娘は我が国土の族人の産みの母となった。

クグループはチャム族、クグルムはチュル族、クグラムはチルムノン、クグローはコホー族、クゲー、クガーはキンを生んだ孫を持った。このように、この民族はみな兄弟なのである。

[Vũ Ngọc Khánh (biên) 1989 : 77-78]

資料8-1：万類と宇宙の起源(スティエン族)

A

なにもない宇宙の最初のころ、森もなく、山もなく、丘もなく、まだ人類もいなかった。どこもかしこも計り知れない大海だった。その時ただ、天だけがいて、一か所に座っていた。彼は管理する者もないおびただしい水を見て考えた。

「地がなければならん。地があってこそ草木があり、草木があってこそ鳥がいて獣がいるのだ。

水中には魚がいて、空には鳥がいなければならん」

万類を作った時、天は告げた。

「儂は万物を見守るために人間を産まなければならぬ。人間は地上のあらゆるものを管理するだろう。人間がいれば生活も楽しくなり、安心することができる」

この時、30の爪がある巨大な鶏がおり、その鶏は不均一に掘ったため、谷、山、丘、高地、低地が生まれた。

各地、各国で、天は二人の兄妹⁽¹⁴⁾を産んだ。最初、各々の人の集団は一民族で一つの言葉をしゃべった。天は平地と海浜部のキン族と山に住む少数民族を分けた。人間は産んで日増しに増えた。

昔、稲は非常に大きかった。コメ一粒は亀の甲羅と同じ大きさだった。散るコメ一粒は人間の頭を打った。米を食べるのに人は割る必要があった。

人間が苦勞しているのを見て、天は命じた。

「ひどく困っているのだから、米粒を小さくする

ことにした。巨大な米粒が頭を壊すことのないよう、巨大な米粒を罷免する」

この時水牛や牛たちは草を食べることを知らず、人間のようにおかゆを食べていた。また豚は草を食べていた。人類は天に対しはじめて嘆いた。

「水牛と牛は草を食べてください。おかゆを食べるなら、我々は飼育できません」

それを聞き、天は水牛と牛が草を食べ、豚が人間のようにおかゆを食べるように作り直した。しかし人間はよく雷に打たれて死んでいた。天はそれを見て雷を減らした。

人間の生活は平安になった。しかし、しばらくして人間は多くの罪を犯した。冷飯と温かいご飯が衝突し、ひざは衝突し、ひじは衝突したので、雷を引き起こした。雷は森の火事を引き起こした。天は人間に怒り、それで、ウナギを捕まえ、シキチョウ、雷魚を切り刻み、人間を焼いてしまおうと森に火を点けた。しかし天は人間を脅しただけだったので、この後水を噴出して火を鎮めたのだ。そのため、人間は今まで生き延びているのだ。その昔の森の燃えた災難で、今日炭鉱、たくさんの油田ができるようになったのである。これはまさに人間に渡された天の功勞である。

ディエウ ブレイ、1935年生
ビンフォク省ドンフー県ドンティエン村第5集落
[Phan Xuân Viện (biên) 2015 : 53-55]

資料8-2：スティエンの起源 A

最初のころ、まだスティエンはいなかった。ディエン翁は天の子だったが、子がなかった。翁はこの世のプロム婆を娶り、クノンホールという子を産んだ。ディエン一族こそ、まさにスティエンの先祖である。ディエン翁にはリエンマーという妹がおり、夫に嫁いたが子がおらず、ただ翁だけが子がいた。このように、スティエンはディエン翁の子孫である。

ディエウジョイ 1910年生
ビンフォク省ロックニン県ロックホア村第8A

集落

[Phan Xuân Viện (biên) 2015 : 61]

資料8-3 : スティエンの祖先 AE

昔、名も年齢もはっきりしないが天から神が降りてきて、一人の女性を愛した。女性が妊娠した時、その神は天に帰ってしまった。

その女性は3人の子、一人の男子と二人の女子を出産した。神の子であるがため、母の腹にいるときから3人ともしゃべることができた。月日が満ちた時、3人は譲りあい、誰も先に行こうとはしなかった。兄は妹たちに譲り、妹たちは兄に譲った。天にいた父はそれを見て、兄に告げた。

「お前は兄なんだから刀を取り道を拓け、二人の妹はそれに続け」

兄は先に行き、母の腋から生まれることができた。その名はディエンといい、二人の妹はボンディエン、リエンマという。これがまさにスティエンの祖先である。

ディエウ・ネット 1952年生
ビンフォク省ビンロン県タインビン村ビンニン集落

[Phan Xuân Viện (biên) 2015 : 61-62]

資料8-4 : スティエン族の起源 A

最初に出現した男はザイチャンエン、そして女はデンカゼットであった。二人は結婚して4人の男の子が生まれた。一人目がジェンジャウスラ、二人目がカルンミ、三人目がサラコンチ、四人目がカルンミエムボンと言った。

夫婦にはさらに5人の娘が生まれた。ロム、リエンマ、カマ、ガリンマ、パソマ。

ロム婆はディエン翁と結婚した。二人は7人の娘に恵まれたが男の子はいなかった。リエンマ婆はトンバリ翁と結婚した。ガリンマ婆はンガロンホールと結婚した。パソマ婆はブンサテン翁と結婚した。

このあと、各夫婦は異なる方向へ行き、集落をつくり、次のような一族を作り出した。チャ

ンサライ、チャンジャリン、タムン、ヴォクレイ、ナラ。。。

スティエンは同じ一族では結婚できないという決まりがあり、結婚する時は夫や妻を見つけるためにあちらこちらの集落に行かなくてはならない。

多くの猛獣が出現した後、やってきて水牛と牛を食べ、それから人に害を及ぼして、集落の人々は驚き恐れた。彼らは猛獣が来るのに抵抗しようと方法を探した。そのため、各集落は連結しあい、幾つかの共同体になった。これより、各一族は結婚しあい、どんどん繁殖して今日のスティエンの系統を作ったのである。

ディエウハン 1963年生
ビンフォク省ビンロン県タンロイ村チャオA集落
[Phan Xuân Viện (biên) 2015 : 63-64]

資料9 : ダーリーン ドン⁽¹⁵⁾ (マー族) AB

「大きな海の水は水嵩が増え、タイグエンの山や森は一瞬のうちに水浸しになった。プラー山は篩のように、サブン山は筥のように、バンベル山は鉦のように、プリング山は竹の網格子のように、プトーング山は杵のように、シンサーイ山は瓜のようにあり。。その洪水の後、ただ二人の人間が生き残った。二人は愛し合い、子を産み、多くの集落を建設し、その時から集落はマー、コホー、チャムやムノン、スティエン、キン族に分かれた。

クティーク 48歳⁽¹⁶⁾
バオロク県ロクバク村ブナウ集落 [本多2000b : 24-25] 参照

資料10 : ムノン族の伝説 (ンコックヤオ) A

「クンという名の神がルーと結婚しボンが生まれ、ボンがロンを産む。ロン翁はボンを娶りチャンを産む。チャンは一つの瓢箪分の土、7匹のミミズ、7本の木、7つの瓢箪分の水を持ってきた。いい土はランという名の背負い籠に、丘陵はプロットジョという名の背負い籠に入れて持ってきた」

チャンという神が地を作り、万物を生み出し、ムノンを生み出したのだ。

ムノンの宇宙観では、世界は7層になっていて、各層には太陽があり、無限に広い、ぼんやりとした空間で、土、万物と人間だけだった。ムノンのいる世界は真ん中にあり、第4層である。瓢箪一つの土、7匹のミミズ、7本の木はチャン神が第4層（死後の世界）と上の層（つまり天の層）から持ってきたのだ。土ができた時、「ルリン、ムパン、ロンオンの草が生まれ、サトウキビ（タオパ）が生えてきた。チャン神は棚を立てて家の前で供物を供え、集落を建設した」（資料未公表）

ティンロンタンロンは穴から石を作っている間に、亀は、蝶ダムと蝶カムドップに命じて石を刻んで最初にブルット翁を産み、二回目にブルー翁、三回目にンドゥ、ドン翁、4回目にソン、ジャン、クラン、ボック、ニョック、ニヤック・すなわちドイ翁の子を産んだ。ニョップ、ニョイ、ドイ翁は石を作り、滝を作り・・・そのあとでムノンを作り出した。。。。

[Y Thi 1984 : 13-14] 参照

<注>

- (1) ロロ族の人類誕生神話ではケゼ、カゼという神が土で練って作った兄妹が結婚して人類が誕生する。そして旱魃と洪水の時代を経る。
- (2) 筆者の知る限りビンフォク省やラムドン省にまで南下している。その南下は1985年以降に顕著となるが、ヤオ族は1975年以前にはいたようである。
- (3) 『山王と水王』と同じモチーフを持つ話が、クメール族にもある（『ニエックボヌムとニエックタトゥック』）。
- (4) ベトナムの民族分類ではトー族はタイ族の異称。黒タイはターイ族系と分類される。
- (5) 余談だがスティエン族には民族起源説話ではないが、洪水伝説『なぜ現在のように洪水があるか』[Phan Xuân Viên (biên) 2015 : 57-58]がある。川神と溪流の神が水を汚した人間を罰す

るために洪水発生させるという話である。これも神罰洪水型である。

- (6) 槃瓠型、カラング型、癩病型、漂着型、洪水型、親孝行型、東北アッサム型、出現型である。
- (7) 但し、カラング型では男の尿を雌猪が飲んで妊娠するので、モン・クメール系と逆である。
- (8) この話はヴェ集団、トゥリエン集団の居住する地域で流布している伝承である。
- (9) 次の話はセダン族の居住する多くの地域で話される。「洪水の後、女性と犬だけが死を免れた。彼らは結婚し一人の男の子を産んだ。ある日母は子供に平野にいる父に御飯を持っていくように命じた。焼畑につくと、父の姿は見えず犬がいただけだった。それで犬を叩いて殺し、家に帰って母と結婚した。その後、彼らはたくさんの子供を生んだ。長男は父と一緒に残り、セダン族になり、末っ子は平野に行きキン族になり、たくさんほかの子は異なる方向に行き今日のエデ、ジャライ、ジェ、コール、フレ、コトゥ等になった」
- (10) スズメ目カラス科オウチュウ亜科オウチュウ属
- (11) この話では三人兄弟、四人兄弟のケースがあり、三人兄弟の場合はヴァンキェウ、キン、ラオカタオイ、ヴァンキェウ、キンである。四人兄弟の場合はタオイ、ヴァンキェウ、ラオ、キンである。
- (12) Lao Thungはヴァンキェウに近い。lao luom-白ラオは平地に住む。（訳注：ラオスの民族分類：プロト・インドネシア種族を高地ラオス人Lao Thung、タイ種族を低地ラオス人lao luom）に分類している [上東1992 : 63] [青山1995 : 15]
- (13) 天の神
- (14) ベトナム語での「妹」は「弟」にも訳すことが可能である。
- (15) マー語で大きい海の意。
- (16) 1986年出版以前の収集での年齢である。

<参考文献>

綾部恒雄

1971『タイ族－その社会と文化－』弘文堂.

生田滋

1974「東南アジアの建国神話」大林太良編『日本神話の比較研究』法政大学出版局 201-267.

伊藤清司

1985『中国民話の旅から－雲貴高原の稲作伝承－』日本放送出版協会.

ヴィアル（鳥居竜蔵訳）

1966「ロロ族の創世神話」大林太良編『現代のエスプリ 神話 第二十二号』至文堂 175-180.

大林太良

1976『日本の神話』大月書店

1993「東南アジア・オセアニアの犬祖説話」埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』朝倉書店 125-134.

1994「洪水神話」大林太良/伊藤清司/吉田敦彦/松村一男編『世界神話事典』角川書店 94-114.

樫永真佐夫

2003「(注釈) クアム・トー・ムオン - ムオン・ムオイの黒タイ年代記」『ベトナムの社会と文化』163-243.

君島久子（編訳）

1983『中国の神話 - 天地を分けた巨人 - 』筑摩書房.

富田健次編訳

1991『ベトナムのむかし話 (大人と子どものための世界のむかし話)』偕成社.

根岸範子・前田初江（訳）

1994『ラオスの民話』黒潮社.

福田晃

1976「『犬犂入』の位相と伝播」『昔話の伝播』弘文堂. 10-84

フレイザー, ジェイムズ・ジョージ（星野徹訳）

1973『洪水伝説』国文社.

本多守

2004a「ベトナム中南部少数民族の説話の分析 (1) 『白山人類学』7 白山人類学研究会. 153-164.

2004b「タオイ族の伝承」『ベトナムの社会と文化』

5/6 合併号 風響社. 226-237.

2005「ベトナム中南部少数民族の説話の分析 (2)」『白山人類学』8 白山人類学研究会. 134-159

グエン・テー・サン, グエン・ヴァン・フエ他編（本多守訳）

2005「ラグライの昔話 - ベトナム・マレー系山岳民族の口頭伝承 - 」岩田書院.

宮本神酒男

2001「犬祖説話とオイディプス神話 - カトゥー族の伝承を中心に - 』『中国民話の会通信』60号 村松一弥

1973『中国の少数民族 - その歴史と文化および現況 - 』毎日新聞社.

グエン・カオ・ダム, チャン・ベト・フォン, 稲田浩二, 谷本尚史（編訳）

1980『原語訳 ベトナムの昔話』同朋舎.

チャンヴェトキーン（本多守訳）

2000『ヴェトナム少数民族の神話－チャム族の口承文芸－』明石書店.

ラムトゥエンティーン（本多守訳）

2000『ランビアン的事蹟－ベトナム・中部少数民族の古伝承－』てらいんく.

百田弥栄子

2004『中国神話の構造』三矢井書店.

李星華編（君島久子訳）

1980『中国少数民族の昔話 - 白族民間故事伝説集 - 』三弥井書店.

Đặng Nghiê m Vạ n(biên)

1984 Dân tộc Xơ đ ă ng, Các Dân tộc ít người ở Việt Nam (các tỉnh phía Nam) ,Hà Nội; Nxb.Khoa học xã hội.

Phan Xuân Việ n (biên)

2015 Truyện cổ Xtiê ng, Hà Nội; Nxb. Khoa học xã hội.

Trầ n Mạnh Ca ́ t

1984 Dân tộc Gié -Triê ng, Các Dân tộc ít người ở Việt Nam (các tỉnh phía Nam) ,Hà Nội; Nxb.Khoa học xã hội.

UBND Tỉnh Lâm Đ ồ ng

2001 Đ ịa Chí Lâm Đ ồ ng, TPHCM; Nxb, Chính trị

Quốc gia- Sự thật..

Vũ Ngọc Khánh (biên)

1989 *Nhân vật thần kỳ các dân tộc thiểu số Việt Nam,*

Hà Nội; Nxb.Văn hóa dân tộc.

Y Thi

1984 *Truyện ở M'Nong 1* , Đắk Lắk: Nxb.Sở văn hóa
thông tin.

(客員研究員／東洋大学社会学部・非常勤講師)

Commonality of the Origin Tales of the Mon Khmer Ethnic Group in Vietnam

HONDA Mamoru

In Vietnam, researchers from various fields are actively collecting folk tales. The author has long been investigating the social structure of the Mon-Khmer ethnic groups. While doing that research, the author was able to obtain many folktale publications in Vietnam. Therefore, in this paper, the author deals with the story of ethnic origins of the Mon-Khmer ethnic group and neighboring ethnic groups, which is also the subject of the author's research. In particular, the author analyzed commonalities, paying attention to motifs such as the legend of floods and marriage with dogs. As a result, most of the characteristics of the northern Khmer tales have a flood motif of unknown cause. Many of them have the motif of a dog marriage, an abnormal birth and then a Consanguineous marriage. However, when it comes to the peoples living in the south, that characteristic gradually disappears. The author has clarified the above.

Key words: the story of ethnic origins, the legend of floods, marriage with dogs, abnormal birth, consanguineous marriage